小笠原

編集兼発行
公益財団法人 小笠原協会
東京都港区海岸１-12-２
竹芝客船ターミナル２階
電　話 03－3432－4921
ＦＡＸ 03－3432－4487
振替貯金口座(郵便)
00190－９－64610
みずほ銀行芝支店
普通 3242428

本年4月の統一地方選挙の村会議員選挙で7人の村会議員が誕生しました。

また、7月には村長選挙が実施され森下村長が5選をはたされました。

今号では、村長、村会議長、議員の皆様からご挨拶、抱負を述べて頂きました。

心豊かな暮らしのために

小笠原村長　森下　一男

このたび、7月の小笠原村長選挙において村民の皆様からの負託を受け、小笠原村長として5期目の舵取りを担わせていただくこととなりました。その責任の重さと村民の皆様の期待にお応えするという強い使命感に身の引き締まる思いをいたしているところでございます。

小笠原村は昨年、日本に返還・復帰50周年を迎え、1年を通して島の生い立ち、歴史、文化を振り返り、それらを担ってきた人々に思いを馳せ、式典をはじめとして各種事業を行ってまいりました。その中で思いを新たにしましたのは、老若男女、村民の皆様が願っていることは、溢れる自然の中で心豊かに暮らしていきたいとの思いでありました。

返還50周年という節目を経て、新時代令和を迎えた小笠原では新たな息吹が芽生えています。経済も活性化をし、人口も増えつつあり、子供たちも元気に走りまわっています。そして、次世代を担う人材がいます。私には、16年間の経験とその間構築してきた人脈があります。「村政の安定している現在こそ、次の世代への投資、基盤づくりをしなければならない大事な4年間が始まる。その先頭には自らが立たなければならない。」そう考えました。

また「『自主・自立の確立』、『互助と連帯感の醸成』の村政確立以来の理念のもと、『小笠原島民として皆で共に考え、共に汗を流す』時である。」とも考えました。

これが出馬に至った動機でございます。

選挙においては、「次世代へ繋ぐ夢・希望・未来」をキャッチフレーズとして

○快適に安心して暮らせる島に
○希望を持って暮らせる島に
○活気溢れる中で暮らせる島に
○自然環境と共存して暮らせる島に

の4本の柱を据え、その下に個別具体的な政策を掲げさせていただきました。

結果として多くの方々にご支援、ご支持をいただけたのは、これまでの実績、そして私の訴えに共感してくださったものと考えております。この結果の重みは、私を初心に立ち還らせてくれました。

新時代令和に込められた「一人ひとりが明日への希望とともに、それぞれ花を大きく咲かせることができる。」という思いを胸に、類まれな自然環境の中で動植物を愛し、人に優しく、心豊かに暮らし続けられる小笠原村の構築を目指し、いままで同様、一歩一歩着実に、一つひとつ堅実に、そして何より誠実に、をモットーとして、新たな4年間も日々努力してまいる所存でございます。

結びに、村民及び小笠原旧島民の皆様、並びに小笠原協会賛助会員の皆様の今後益々のご健勝そして更なるご多幸を心より祈念申し上げ、就任の挨拶とさせていただきます。

議長ご挨拶

小笠原村議会議長　池田　望

昨年は小笠原諸島本土復帰50周年を、国土交通大臣、東京都知事他ご来賓をお迎えし島民とともに祝うことができました。

そして今年は村政確立40周年です。

本土復帰後、昭和43年からの10年間は小笠原支庁長が村長職務執行者として、また村議会に代わる機関として村政審議会が置かれていました。

昭和54年の4月22日の統一地方選挙で、村長及び村議会議員の選挙が行われ小笠原村政は確立されたのです。

さて今年4月の統一地方選挙で小笠原村議会も選挙を実施しました。しかし立候補者が定数を超えず初めて無投票となり、様々なご意見が在りました。

議会が何をしているのかわからない、そもそも議会は必要なのか、報酬が少なく魅力がないなど・・、議会と住民との間に乖離があるようです。議会の役割を理解して頂けるよう行動しなくてはならないと痛感しました。

復帰当初からの課題である交通、通信、医療は改善されました。光ファイバーケーブルが敷設され本土と遜色ないテレビ、携帯電話の使用ができます。医療も離島にしては恵まれています。　おがさわら丸、ははじま丸ともに新造船が就航し概ね好評を得ています。

しかし悲願として返還当時から要望してきた航空路だけは未だ叶いません。都とともに最大限の努力をしなくてはなりません。

小笠原協会には村の振興にご指導ご協力を頂いております。感謝申し上げます。

返還前の帰郷促進連盟の活躍や、返還時の協会の役割など機関誌（小笠原）で知ることができました。小笠原への思いを共有する機関誌としてこれからも続けて頂きたいです。

またかつて空港断念や、テクノスーパーライナーの就航が取りやめになり、経済も低迷していた時期には、小笠原協会主催の小笠原ツアーで100人を超えるお客様をお連れになり、再会を喜び島民も元気を頂きました。このツアーも今年で20回目になるのでしょうか。回を重ねるごとに何度も訪れる方も増え再会を待ち遠しく思います。

今年も皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

副議長ご挨拶

副議長　杉田　一男

返還50年を迎える今日、小笠原村は、医療、介護、高齢化対策、教育、防災対策や環境問題等多くの課題を抱えています。私は今後四年間に、特に次の三つの課題に取り組んでまいります。

はじめに議員就任前より取り組んできました航空路の開設です。これにより村民の皆様が日々安心して生活ができるようになることが大事です。

医療面では人工透析は言うに及ばず、様々な先進医療への道が開かれます。また内地での滞在日数の短縮による心と身体、経済的な負担の軽減など、全ての村民に共通する負担・不安の解消につながります。こうした島民生活の最も基本的な安心感を確保するため、環境をはじめ様々な影響を最小限にしつつ、航空路を早期に開設するよう、国・都へ働きかけるなど、努力してまいります。

次に、旧島民の皆さまへのご支援をはじめ、返還後も未だに解決していない課題への取組みです。圧倒的多数の旧島民の皆さまは故郷を偲びつつも、断腸の思いで帰島を断念されました。

戦後74年を経てなお残された硫黄島の遺骨の収集や墓参、そして小笠原諸島全体に共通する、農地の確保など、困難なゆえに進まぬ課題ですが、この取組は小笠原島民の矜持となり、今後の発展のためにも重要です。

最後に、環境の問題です。分解せずに地球上のいたるところに堆積していくプラゴミの削減は、国連や先進国首脳会議でも議論され、取り組みが始まっています。

ガラパゴス諸島でさえ人口、観光客の増加と共にレジ袋も増え、ユネスコからも早急な取り組みが示されたとも聞いています。

漂着ゴミは、四方が海に囲まれた美しい小笠原でも悩ましい問題となっています。また海域では、魚が飲み込む0．5㎜以下のマイクロプラスチックの撤去の重要性が指摘され、陸上でも空気中に浮遊するプラゴミが増えていると聞きます。

プラゴミへの抜本的な対策は当然のこととして、先ず私たちに出来る、プラゴミをこれ以上増やさないことや、海岸、浮遊ゴミの撤去清掃対策を急ぐことが大事です。

財源の確保、費用の負担を明確にし、具体的な力強い取り組みを世界自然遺産の小笠原から発信していきたいと思います。

（議員挨拶）

村会議員　片股　敬昌

三十代の頃、米国ブッシュ大統領に関する本を読む中で彼が父島上空で撃墜されながらも奇跡的に救助されていたことを知った。当時の私は小笠原については全くの無知であり、このことが小笠原に大きな興味を持った理由です。

この頃には朝鮮半島の三十八度線にある板門店の視察に行っており国連軍と北朝鮮軍が対峙する緊迫した空気を肌で感じていました。ポプラ事件などもあり特に緊張した国際情勢でした。

現在の日韓関係は最悪の事態となっており心を痛めている一人ですが、日本の明治維新に習い朝鮮の改革と近代化を成し遂げようとしていた「金玉均」が改革に失敗し、日本の小笠原に亡命していた時期があります。

島民に囲碁を教えるなど親密だった交流の歴史、和田延次郎との師弟愛、上海までの道のりなどに光をあてることで日韓友好の一助になればと願うばかりです。

村会議員　安藤　重行

今回は議員定数内での選挙のため、島民の皆さんの信をいただくことは叶いませんでしたが、合格ということになりました。

二期目は、年金問題の2000万円問題の一つの解決策としてシルバー人材センターの設置等、公約を実現させたいとの思いから、次世代に繋ぐための課題に向き合ってまいります。

国民健康保険・介護保険・障害児・高齢者等目まぐるしく変化する福祉問題。防災に強い島を構築するためのエネルギー問題、太平洋ゴミベルト地帯での海洋プラスチックごみ問題、世界遺産を守る保全活動や硫黄島問題、役場職員の育成問題等多くの課題が渦巻く中で、自立社会を構築していくことが大切です。

総合相談を実施したことで、多くの相談をお聞きし、丁寧に解決していきたいとの思いから、皆様のご意見を村政や都政に反映させるように取組みました。今期も安心して暮らせる島にするために4年間頑張りますので、ご高配を賜りますようお願いいたします。

最後に小笠原協会関係者の皆様の益々のご健勝をお祈りいたしております。

村会議員　清水　良一

小笠原協会に関係される皆様いつも大変お世話になっております。

この度小笠原村村議会議員として2期目を務めることになった清水良一です。

一期4年間、エネルギーと食料の自給率アップを目指し持続可能な暮らしをテーマに活動をしてきました。

地球温暖化による台風の大型化や渇水、廃プラスティックなどのごみによる汚染など小笠原村にも影響のある環境問題は待ったなしにやってきています。

当村は2011年にユネスコの世界自然遺産にも登録され、世界から注目を集める場

所となりました。ユネスコも含めた国連ではＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を掲げ世界が一丸となって17の目標を達成するために動き出しています。

世界自然遺産の島に住んでいる私たちも持続可能な暮らしを目指し世界に恥じない世界のモデルになれるよう努力していきたいと思っています。

又、第２次世界大戦後、旧島民の帰島が許されない硫黄島を持つ当村は、世界に平和を発信し続けなければならないと思っています。いつの日か硫黄島を世界中の人が平和を祈れる平和のモニュメントとなるように活動して行きたい。

そして、いつまでも自然豊かな平和で美しい島に住み優しくのんびりゆっくりした島民気質を失わないよう、二度と「昔が良かった」なんて言わないように未来を見据え今を生きていきたいと思います。

村会議員　築館　俊一

会員の皆様、初めまして。この度、村議会議員に当選いたしました。築館俊一と申します。

私は母島出身で返還して間もなく、父親と一緒に故郷にかえりました。長い船旅を経て、母島の地に着いたときは、ほっとした思いが今も記憶にあります。樹木が茂り、道路も整備が出来てなく、ここで生活ができるのか不安でした。

あれから、早いもので返還50年がたち、小笠原も少しずつ良くなり、島民が帰って来ましたがまだまだ、課題が沢山あります。航空路アクセスの問題、医療福祉など、島民一人ひとりが末永く、安心安全な生活が出来るように、国、東京都、村などに訴えていきたい。

希望ある村づくりを造るため、皆様と共に頑張っていきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

村会議員　金子　隆

この4月より新たに村議会議員として活動させていただいております金子隆です。

30年前に小笠原に魅せられて移住し、自然ガイドとして島の自然や暮らしの素晴らしさを伝えるべく海や山で活動してきました。

これまで色々な経験もさせていただき、また育てていただいた地域への「恩返し」をしていきたいと強く思っています。

世界でも稀有な自然に包まれて暮らし、子供たちが育っていく島の日常。島の愛情に溢れた島民や来島者が醸し出す豊かな地域性。そんな、今ある小笠原の良さを、未来に向けてもっと伸ばしていくにはどうすればいいのか、まずは出来ることから働いて参ります。

できるだけ多くの皆さまの気持ちやお声に耳を傾け、それを村政に届けてこの島の将来に活かしていきたいと考えております。小笠原協会の皆様どうか今後ともよろしくお願い致します。

小笠原諸島振興開発計画（素案）の概要

昨年度末の小笠原諸島振興開発特別措置法の延長を受けての小笠原諸島振興開発基本方針に基づき計画素案が発表されました。９月末までにパブリックコメントを終え年内に計画が策定される予定です。

第１ 計画の基本的事項

【策定意義】 今後の小笠原諸島の振興開発の基本的方針と施策の方向を明確化し、振興開発事業を積極的に推進

【位置付け】 小笠原諸島振興開発特別措置法に基づき、都が定める法定計画

【計画期間】 令和元年度～令和５年度までの５年間

【計画のポイント】

○引き続き、生活環境・産業基盤等の整備を確実に実施

○おがさわら丸のドック期間中の代替船について、確保に向けた支援を実施

○実現可能な航空路案のとりまとめに向け、課題の整理、検討を推進

○老朽化した小笠原住宅、保育施設・村民会館、小・中学校の建替え等を計画的に推進

○母島においてゼロエミッションアイランドの実現に向けた取組を実施

第２ 振興開発の成果と課題

【これまでの成果】

○おがさわら丸、ははじま丸の新船建造（平成28年７月から就航）

○生活・交通・産業基盤の整備は相応の成果

【今後の課題】

○産業

・本土からの遠隔性等により、産業発展にとって不利

○自然環境

・外来種の侵入などが希少な自然環境に影響

○交通アクセス

・片道所要約24時間、約６日に１便の航路に限定

・航空路開設に関し、課題の整理・検討が必要

○生活環境

・保健・医療・福祉の充実

・施設の老朽化、ライフライン安定維持、防災対策

第３ 基本的方針

特措法に基づき、国から示された小笠原諸島振興開発基本方針における施策の方向の下、振興開発事業を進め、住民生活の安定・福祉の向上、定住の促進を図り、自立的発展を目指す。

【施策の方向】

○生活環境の整備・産業の振興による定住の促進

○小笠原諸島内外の交通アクセスの整備による利便性確保

○世界自然遺産登録を踏まえた自然環境の保全・再生

第４ 分野別事業計画

１ 土地の利用

・地籍調査の推進等による土地の有効活用、土地利用等に関する検討

２ 道路や港湾等の交通施設の整備、人の往来等に要する費用の低廉化

・おがさわら丸のドック期間中の代替船確保に向けた支援を実施。併せて、ははじま丸のドック期間中の代替船老朽化への対策を検討

・航空路の開設については、必要な調査を引き続き実施するとともに、関係者と議論を深め、実現可能な航空路案の取りまとめに向け、課題の整理、検討を推進

・道路の継続的な改良・整備により安全性・快適性等を向上

３ 農林水産業、商工業等の産業の振興開発

・生産基盤の整備や技術の改善・普及等により農水産業を振興

・他産業との連携による小笠原ブランドの定着・普及

４ 雇用機会の拡充、職業能力の開発

・生産基盤の整備や研修施設等の活用により、新規就業者を確保・育成

５ 住宅、生活環境の整備

・住宅政策を検討し、老朽化した小笠原住宅の建替えを計画的に推進

・老朽化した浄水場の建替え（母島）、渇水対策として第２原水調整池の整備（父島）

・資源化中継施設の整備によるごみの一層の減量化・リサイクルの徹底の推進

６ 保健衛生の向上

・医療・福祉との連携体制の強化・充実、健康診査等の継続的な受診機会の確保

７ 医療の確保

・画像電送システムの更新により、へき地での診療活動を一層充実

８ 高齢者の福祉その他の福祉の増進

・保健・医療との連携体制の強化・充実

・老朽化した保育施設・村民会館の建替えを実施（母島）

９ 自然環境の保全・再生、公害の防止

・固有動植物の保全や植生回復等への取組、絶滅のおそれのある野生動植物の保護増殖事業の実施

・関係機関等と連携して外来種対策等を実施

10 再生可能エネルギー源利用

・太陽光発電等の積極的活用

・ゼロエミッションアイランドの取組の一環として、母島において実証事業に向けた調査を実施

11 防災、国土保全に係る施設の整備

・避難支援体制の強化、防災教育等による地域防災力向上

・砂防、地すべり対策等の防災・国土保全施設を引き続き整備

12 教育・文化の振興

・老朽化した小・中学校施設の建替えを実施（父島）

・都立小笠原高校における一層の教職員の体制整備

・民族文化等の研究拠点としての活用とその成果の発信を検討

13 観光の開発

・関係機関と連携し、小笠原諸島の魅力を継続的に発信

・観光施設整備事業を継続的に支援

・産業振興促進計画認定制度の活用を検討

14 国内・国外の地域との交流の促進

・教育旅行等の更なる誘致

・友好市町村との交流、新たな交流プログラムの開発検討

15 振興開発に寄与する人材の確保・育成

・地元への愛着と創意工夫により地域づくりを担う人材を育成

16 関係者間における連携・協力の確保

・多様な主体が連携・協力し、それぞれの特性や役割を生かした主体的な取組を推進

17 帰島を希望する旧島民の帰島の促進

・高齢化した帰島を希望する旧島民の受入れに対応し、高齢者の状況に配慮した環境を整備

・硫黄島・北硫黄島においては定住が困難なため、父島・母島への集団移転事業に類する措置を引き続き実施

小笠原諸島振興開発基本方針の概要

小笠原諸島の振興開発の意義及び方向

振興開発の意義

小笠原諸島は、東京から南へ1,000Km離れた太平洋上に位置し、国境離島として我が国の**排他的経済水域の約3割**を確保している地域であり、この地域で住民が暮らし、実際に諸活動を営んでいることが、**我が国の安全の確保や排他的経済水域等の保全、自然環境の保全・再生や文化の継承等の役割**を果たしていくこととなる。このため、交通アクセスの改善等の諸課題を解決し、その**自立的発展、住民の生活の安定及び福祉の向上並びに定住の促進を図る**ことが重要である。

振興開発施策の方向

(1) 生活環境の整備・産業の振興による定住の促進

◆ 復帰50年を経て、高齢化の進展を踏まえた**保健、福祉及び医療の充実。**

◆ U･Iターンを含む**若い世代の定住促進に向けた住宅の確保や簡易水道、学校施設等の老朽化対策、災害対策等を含めた社会資本の整備等**に取り組む。

◆ 小笠原諸島の気候等の特性に即した農業、漁業の振興を図るとともに**エコツーリズム等の地域資源を生かした観光振興**により、雇用機会を確保する。

(2)小笠原諸島内外の交通アクセスの整備による利便性の確保

◆ 住民及び観光客の唯一の交通手段である定期船「おがさわら丸」等については、その**安定的な運航の確保に向けた港湾施設等の整備**を推進する。

◆ **島内道路等の整備**により利便性の向上を図る。

◆ 航空路に関しては、離島航空路線が住民の生活路線であること等に鑑み、**地元の意見や自然環境との調和に十分配慮しつつ、航空路の開設を含め、必要となる取組に努める。**

(3) 世界自然遺産登録を踏まえた自然環境の保全・再生

◆ 世界遺産委員会の決議を踏まえた**外来種対策**や**開発における適切な環境配慮**等、自然と調和・共生する取組を進める。

◆ 住民が居住し観光客が来島する父島、母島においても、世界自然遺産の区域が大部分を占めていることを踏まえ、**教育・普及啓発活動の充実**に取り組むなど、小笠原らしい貴重な自然環境の継承を図る。

◆ 世界自然遺産としての知名度を活用し、小笠原諸島における**自然との調和・共生の取組を内外に発信**する。

小笠原諸島の振興開発を図るための基本的事項

1　土地の利用に関する基本的な事項

2　道路、港湾等の交通施設及び通信施設の整備、人の往来並びに物資の流通及び廃棄物の運搬に要する費用の低廉化その他の小笠原諸島以外の本邦の地域と小笠原諸島及び小笠原諸島内の交通通信の確保に関する基本的な事項

◆ 航空路の開設に関して、国は東京都と小笠原村との連携を強化し、情報の共有に努め、技術面での助言を行うなど必要となる取組に努める。

3　地域の特性に即した農林水産業、商工業等の産業の振興開発に関する基本的な事項

4　雇用機会の拡充、職業能力の開発その他の就業の促進に関する基本的な事項

5　住宅及び生活環境の整備に関する基本的な事項

◆ 関係機関の連携のもと、定住者の住宅確保に向けた取組を推進。

6　保健衛生の向上に関する基本的な事項

7　高齢者の福祉その他の福祉の増進に関する基本的な事項

8　医療の確保等に関する基本的な事項

9　自然環境の保全及び再生並びに公害の防止に関する基本的な事項

◆ 希少野生動植物の保護増殖、海岸漂着物等の処理、生態系に被害を及ぼすおそれのある外来種の防除、国立公園の適正な保全及び利用等を推進。

10　再生可能エネルギー源の利用その他のエネルギーの供給に関する基本的な事項

11　防災及び国土保全に係る施設の整備に関する基本的な事項

12　教育及び文化の振興に関する基本的な事項

13　観光の開発に関する基本的な事項

◆ 世界自然遺産登録の趣旨を踏まえつつ、自然環境、歴史、文化等の地域資源を生かしたエコツーリズム及びエコツアーガイド制度の推進や、質の高いガイドの育成に向けた取組等を推進。

14　国内及び国外の地域との交流の促進に関する基本的な事項

15　小笠原諸島の振興開発に寄与する人材の確保及び育成に関する基本的な事項

16　小笠原諸島の振興開発に係る事業者、住民、特定非営利活動促進法第2条第2項に規定する特定非営利活動法人その他の関係者間における連携及び協力の確保に関する基本的な事項

17　帰島を希望する旧島民の帰島の促進に関する基本的な事項

◆ 帰島阻害要因等の把握に引き続き努める。

全国硫黄島島民の会が開催されました

令和元年9月8日（日）午後1時から川崎日航ホテルにて、第48回全国硫黄島島民の会が開催され、100人を超える皆さんが参加されました。

寒川蔵雄会長の挨拶では、返還50年を経ての新たな一年目となり、故郷硫黄島の歴史を風化させないためにもさらに島民の会を継続発展させていきましょうとの決意とともに墓参の再開についての報告がなされました。

その後、小笠原村長代理の石原洋介総務課課長補佐と小笠原協会渋井信和会長の来賓挨拶、懇親会と続きました。

会場には、島民情報コーナーや島の特産である島とうがらし、ハルタマ（金時草）などが展示され、後半では、美味しい料理とお酒をいただきながら思い出話に花を咲かせていました。

舞台では、恒例の「フーテンの寅さん」も登場、会場を賑わせていました。

また、昨年に引き続き小笠原古謡の唄うたい「ｏｋｅｉ」さんのリードで参加者が東京都指定の無形民俗文化財である「南洋踊り」を体験。その後カラオケコーナーに移り、多くの皆さんが自慢の歌声を披露されました。

今後もこの全国硫黄島島民の会が益々発展されることを祈念いたします。

小笠原諸島振興開発審議会委員の任命

小笠原諸島振興開発審議会委員の任期満了に伴い、令和元年8月1日付けで委員計14名が任命され、小笠原協会からは、渋井信和現協会会長に代わり新たに小暮　実協会理事が任命されました。

【小暮　実理事紹介】
現公益財団法人小笠原協会理事
現東京都市長会事務局長
前東京ビックサイト常務取締役
元東京都産業労働局理事
元東京都総務局行政部市町村課長

小笠原研究 紹介シリーズ

23年間の小笠原研究を振り返る

首都大学東京
特任教授　可知　直毅氏

東京都立大学（現：首都大学東京）の小笠原研究の始まりは、小笠原が日本に返還された1ヶ月半後の1968年8月に実施された海洋生物学者でもある團勝磨総長を団長とする調査団の派遣である。

一方、私の小笠原研究は、1995年7月、環境庁国立公害研所（現：環境省国立環境研究所）から都立大学に助教授として異動した後に始まった。

当時、すでに都立大学は日本における小笠原研究の中心であり、植物生態学研究室でも小笠原の植物や植物群集の研究を継続・展開していた。そのため、私の新たな研究フィールドが小笠原になったのは自然であった。

私は、大学院生のころから、一生に一度だけ繁殖して枯死する一回繁殖型植物の個体群動態（ある地域に生息する生物の個体数の増減の様子）と生活史の進化について研究していたこともあり、小笠原でも関連した研究を展開できないかと考えていた。オオハマギキョウという小笠原の固有植物が一回繁殖型であると知り、この植物に会ってみたいというのが、私が小笠原に渡島した最初の動機であった。

父島に小笠原の植物について生き字引のような方がいるといって紹介されたのが、安井隆弥先生である。安井先生から、オオハマギキョウはヤギがいる父島では絶滅に瀕しているが、父島の属島の東島にはまとまった数の個体が生き残っているとうかがい調査を開始した。その結果、オオハマギキョウは発芽してから繁殖するまで、東島では平均4～5年程度かかっているが、温室などで肥料を入れて成長を早めると1～2年で繁殖することなどがわかった。

10年にわたり東島のオオハマギキョウの個体群の拡大過程の調査を継続していたが、2006年の夏に突然オオハマギキョウが姿を消した。その後の調査で、クマネズミによる食害がその原因であることが明らかになった。この事件により、外来生物の脅威を実感したことが、その後ギンネム、モクマオウなど外来植物の研究に注力するきっかけとなった。東島のネズミは殺鼠剤の散布により2010年に根絶され、その後オオハマギキョウの個体群は回復しつつある。

東島（父島列島）のオオハマギキョウ

2007年に首都大学東京と東京都が連携し、IBO（小笠原自然文化研究所）をはじめ、さまざまな専門の小笠原研究者と協力して南硫黄島の学術調査を実施した。実は、私自身は現地に行かず、裏方として参加したのだが、小笠原の自然の価値を再認識する機会となった。この調査結果は、2011年6月に小笠原が世界自然遺産に登録される際にも科学的な成果として活用された。

2010年から、野生化したヤギにより生態系が大きく劣化した聟島（むこじま）列島の媒島（なこうどじま）をフィールドとして、ヤギを駆除した後の生態系の変化について、総合的な研究を開始した。

この研究をとおして、ノベル生態系（novel ecosystem）の考え方の重要性に気づいた。ノベル生態系とは、「原生の人間の影響を受ける前の生態系とは異なるが、人間の管理なしでも持続可能な生態系」と定義される。たとえば、在来種と外来種が持続的に共存する生態系はノベル生態系といえる。

23年間の小笠原研究をとおして、強く意識するようになったのが「研究者の社会的責任」である。研究者は、自然に対する理解を深めることをめざして研究しているが、小笠原では研究活動そのものが保全上の障害にならないよう最大限の配慮が求められる。この考えを理屈ではなく、研究活動をとおして身にしみて実感するのが小笠原である。今後も、研究者として小笠原の世界遺産級の自然と多様な価値観を持つ人々との共生にむけて、貢献していきたい。

（2019年3月7日　小笠原村父島での小笠原ミニシンポジウム（主催　日本島嶼学会）でのご講演内容要旨集より一部改変して抜粋）

可知直毅氏
現首都大学東京プレミアムカレッジ　特任教授、
同大学大学院理学研究科生命科学専攻植物生態学研究室　前教授

小笠原関連著書紹介コーナー

『硫黄島―国策に翻弄された130年』（中公新書）

著者の明治学院大学社会学部教授の石原俊氏は、約20年にわたって小笠原群島・硫黄列島の近現代史研究に従事しており、著書に『近代日本と小笠原諸島―移動民の島々と帝国』（平凡社、2007年）、「〈群島〉の歴史社会学―小笠原諸島・硫黄島、日本・アメリカ、そして太平洋世界」（弘文堂、2013年）などがあります。この1月に、『硫黄島―国策に翻弄された130年』（中公新書）を刊行されました。

著者はまず、19世紀末の近代日本最初の南進論の盛り上りの中で、硫黄列島への入植が始まっていく背景を詳述します。その後、発展していく硫黄列島のプランテーション社会の実態を、拓殖会社による島民管理の側面や、その中でたくましく生き抜いていた島民の生産活動や生活文化の側面、両方の面から描き出します。しかし1945年、硫黄島は日米両軍の凄惨な戦いの場となり、島民の約9割は強制疎開の対象となり、残りの青壮年男性は地上戦に動員されます。硫黄列島はその後、施政権返還までは米軍、返還後は自衛隊の管理下に置かれ、冷戦終結後の今なお島民たちは、帰島できずにいます。著者は、戦後も帰郷できずに困窮し開拓農民や漁船員などとして生き抜いた島民の姿、帰島運動や補償運動の展開、島民の帰島が困難になっていくプロセスを、分析しています。

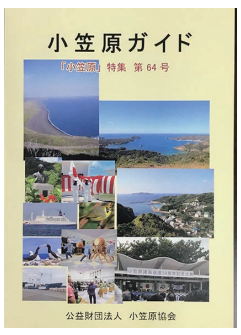
「終章」で著者はこのように述べておられます。

「総力戦期から冷戦期を経てポスト冷戦期に至るまで、日本と米国が幾重にも軍事利用しつくし、島民に与えた被害を感じることなく、さらには島民の存在そのものさえ忘却し続けてきた島。島民の歴史経験が忘れられているかぎり、硫黄島はいまだ「戦後零年」なのである。」

本書の特徴は、著者も述べるように、文献資料に書かれている情報にとどまらず、島民のオーラルヒストリー（口述筆記）を重視している点にあるでしょう。著者も指摘するように、硫黄列島の近現代史を適切なかたちで再構成するには、著者は、オーラルヒストリーが不可欠だと指摘しています。本書には、硫黄列島旧島民に積極的に寄り添い、その体験を掘り起こし、記述に留めようとする迫力があります。

小笠原協会編「小笠原ガイド」を発刊しました

小笠原協会は、協会機関紙の特集号として、この7月末に「小笠原ガイド」を発刊しました。B5、100頁でオールカラー版になっています。



本書は、小笠原に行ったことのない人を対象にしていますが、同時に、島の歴史や宿の情報などをコンパクトにまとめてあり、小笠原のことをよく知っている人にも、覚えとして使えるように作られています。是非、この本を活用して小笠原の魅力を紹介してください。

第1部は、「小笠原ツアーガイド」で、唯一の渡島手段である、「おがさわら丸」、「ははじま丸」や父島、母島のみどころを紹介しています。

第2部では、「もっと知ろう小笠原」として、なかなかなじみの無い、硫黄島、沖ノ鳥島、南鳥島の紹介や小笠原の歴史早わかりなどを紹介しています。

第3部では、父島、母島の宿の紹介となっています。

本書は、東京都の小笠原支庁、小笠原村、小笠原村観光協会、小笠原母島観光協会などのホームページや協会のこれまでの特集号の内容を横断的に引用・編集しており、盛り沢山の内容をコンパクトにまとめています。また、特集号としては、初めてオールカラー版で写真も見ごたえがあります。

この特集号を、小笠原村の全世帯及び旧島民、賛助会員の方々などに配布していますので、是非ご覧ください。また、部数に限りがありますが小笠原協会に寄付金（千円以上）をくださった方に贈呈しています。お問い合わせは、小笠原協会まで。

皆様 ありがとうございました

令和元年5月1日～令和元年8月31日まで

▼個人特別賛助会費

▽三口
稲垣　勇

▽二口
山根　健一
渋井　洋子

▽一口
伊藤　文彦　伊藤みさと　田中　景子
泉野　伸昭　遠藤　宏　河嶌　宏
柴内　康吉　弦巻　悠也　富山　裕司
富山　香子　森澤　正範　和田　文典
小野寺園子　山田　紫織　赤間　厳
赤間　泰子　奥山登喜子　佐藤　謙治
佐藤　永隆　福澤　知子　金指　暁彦
金指なおみ　山口　敬大　石井　克幸
伊原　宗義　内田　和哉　安部　倫世
一瀬　秀樹　菅野　量子　佐藤　洋美
佐藤　洋子　山本　勝博　張本　達宏
石川　由子　山内　悠司　山内　徳子
森　英樹　荻原　正幸　菊地　敬子
平澤　悠子　小濵　哲二　鈴木　松男
齋藤　結花　齋藤　璃空　齋藤　音海
矢花　薫　秋葉　穂　内田　琳音
岡本　良一　渡邉　常義　荻野　雅美
島上　侑馬　藤代　知子　山口　敬一
津吉　慶範　村野　朋光　角田　早紀
高本　義也　竹内　康人　二宮　睦雄
武市　定雄　小林　桂子　森内　春香
高橋　恵子　古屋　知子　伊東　隆介
平澤　智子　池田　司朗　池田　直美
加藤　正樹　笹島　敏子　荒川　昌代
香村　花子　赤間美香子　大津多津典
小林　孝　永田　豊　鶴岡　恵美
告坂　信子　小宮　秀明　加藤　由貴
尾崎　大地　菊地　杏子　宮越　晴美
下垣　佳子　田中　知己　今井友紀子
吉田啓以子　鈴村　淳一　牟田口　淳
牟田口真由美　木村みどり　澤井　進一
澤井　陽子　鈴木麻衣子　長岡　芳正
中村　美幸　松倉ゆき恵　柏原　哲隆
柏原　裕子

▼新規入会者会

▽一口
中村　恭子　長峯　圭助　竹添　慎哉
江尻　康弘　大谷　直子　二宮　義之
安田純一郎　伊藤　敬志　牛山ななほ
萱場　成郎　齋藤　憲明　西田知賀恵
樋口　均　鈴木　保夫　中村　充宏
河本　篤哉　衣笠　彩郁　衣笠　夏蓮
渋谷　大介　渋谷久仁子　久保　友康
福美めぐみ　横倉　康明　横倉　恵子
矢舗　陽子　秦野　文雄　秦野　輝美
宮澤武二郎　田後　要輔　橋山　幹夫
土屋ちづる　小林　誠　中村　宏之
藤田　裕二　藤田　理子　藤田　まや
木藤　直子　井門　秀和　小野寺一彦
木村　成也　渡邊　卓雄　広田　哲章
広田　志濃　広田　蘭　広田　凛
阿部　彰良　岡崎　和宏　岡崎るみ子
久保　晶子　久保　貴洋　尾引美智子
玉井さくら　北川　淳一　北川麻由美
原田　龍貫　山崎めぐみ　細川　雅史
大津　美咲　竹爪　豪　吉田里津子
館　明　髙山木綿子　伊藤　孝将
岡部百合子　黛　尚見　東田　哲昌
東田　美菜　東田いちか　東田　侑大
伊藤　正人　豊留　治代　清水　智江
甲斐　康歳　斉藤　篤志　爲成　貞治
横尾　篤志　飯田　純子　工藤　隆憲
清水　英明　高山　朋子　山入端キヨ子
大津　美咲　竹爪　豪　吉田里津子
館　明　髙山木綿子　伊藤　孝将
岡部百合子　黛　尚見　東田　哲昌
東田　美菜　東田いちか　東田　侑大
伊藤　正人　豊留　治代　清水　智江
甲斐　康歳　斉藤　篤志　爲成　貞治
横尾　篤志　飯田　純子　工藤　隆憲
清水　英明　高山　朋子　山入端キヨ子
宮川　直子　野田　実里　安部　悠子　渡邊　真悠
河村　雄一　木村　桃子　木村　叔音　木本　孝子
木原多恵子　金子　健一　中村　亮太
新見　智　新見麻衣子　今熊　千春
山木由姫路　林　安代　高木　理恵
斎藤　健吾　斎藤　紘乃　笹原　天平
笹原　和代　笹原　光平　笹原　夏樹
山口　圭子　草野　恵子　北郷　隆
北郷　静可　内藤真由美　上原　喜代
小杉　慶子　塩野佳代子　峰岸　裕子
村田　智香　増田由紀子　俵　真未
藤原みさと　徳永　晃一　松本　昌恵
益戸　祐司　北井　雄士　山崎　嘉弘
山崎　昭子　橋村　重美　柴田　光俊
丸山　夏麗　杉野　信夫　上平　真衣
北山　朋裕　寺岡　一郎　宮野　朝子
生駒　篤史　生駒　青波　出口浩太郎
出口　美実　岩崎　恵子　米澤　千夏
伊藤　修一　荒井　努　津田　福代

▼寄付金
▽令和元年特集号
一般財団法人東京都弘済会

▽寄付金
奥山登喜子　藤野多嘉松　宮澤武二郎
水野　勇　菊池　武博

敬称は略させていただきます。万が一、未掲載の失礼がありましたら次号掲載しますのでご一報ください（掲載順不同）

訃　報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

塩路　洋子　様　78歳
平成30年9月21日ご逝去
硫黄島島出身
（旧姓　新井）

横田　篤雄　様　90歳
令和元年9月9日ご逝去
母島出身

令和元年８月気象状況	
（　）内は前年同月（父島）	
最高気温	32.8 ℃
	(32.0 ℃)
最低気温	24.5 ℃
	(25.2 ℃)
平均気温	28.1 ℃
	(28.5 ℃)
平均湿度	86 %
	(83 %)
月降水量	75.5 ㎜
	(43.5 ㎜)
（気象庁　ホームページ）	
令和元年５月中の来島者数	
（　）内は前年同月（父島）	
定期船	3,944 人
	(4,253 人)
観光船	40 人
	(390 人)

令和元年９月１日現在	
（　）内は前年同月	
住民基本台帳登録者数	
○世　帯	1,497 世帯
	(1,489 世帯)
父　島	1,216 世帯
	(1,222 世帯)
母　島	281 世帯
	(267 世帯)
○人　口	2,620 人
	(2,609 人)
父　島	2,162 人
	(2,153 人)
母　島	458 人
	(456 人)

賛助会員 大募集！

小笠原協会の活動は賛助会員の皆様方の会費収入に支えられています。是非、小笠原のファンとして賛助会への入会をお願いします。当協会のホームページをご覧頂くか、お電話いただければ、入会申込書を送らせていただきます。

おがさわら丸の割引証明

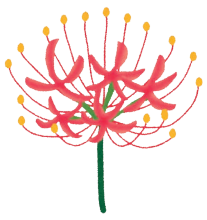
旧島民及び個人の賛助会員の方は、おがさわら丸の乗船割引が受けられます。（2等、特2等）割引の詳細は協会のホームページ等でご確認ください。

ご注意
賛助会員として、おがさわら丸の乗船割引を受ける際のご注意事項

①ご乗船の2週間以上前までに賛助会員の手続きを済ませてください。（2週間を切ると、芝浦の小笠原海運㈱窓口での乗船券購入になります）

②小笠原協会の賛助会員証の発行には、賛助会員であること及び当該年度の賛助会費が納入されていることが条件になります。

旧島民及び関係者（ご子孫、配偶者等）の方
おがさわら丸の割引対象です。割引証明を受けられる方は、小笠原協会にお電話ください。



小笠原協会の賛助会員になると
①おがさわら丸の乗船割引が受けられます。２等、特２等が２割引き（令和元年度）
②小笠原に関する情報を掲載した機関紙「小笠原」年４回発行と「特集号」年１回発行をお送りします

ご入会手続き
①入会申込書のご提出 メール又は fax 等で協会に送付
②会費の納入（新入会の場合）みずほ・郵貯 入会金　1,000 円、年度会費　3,000 円
③賛助会員証の発行（ご住所に郵送） 乗船予約時に小笠原海運に fax 又は郵送

小笠原航路時刻表

（令和元10月～令和2年3月）

ハートロック（千尋岩）

運航月 時　刻	東京発 11:00	父島着・泊 11:00	父島泊 —	父島泊 —	父島発 15:30	東京着 15:30	父島泊数
10　月	1 (火)	2 (水)	3 (木)	4 (金)	5 (土)	6 (日)	3　泊
	9 (水)	10 (木)	11 (金)	12 (土)	13 (日)	14 (月)	
	※1　16 (水)	17 (木)	18 (金)	19 (土)	20 (日)	※1　21 (月)	
	※2　23 (水)	24 (木)	25 (金)	26 (土)	27 (日)	※2　28 (月)	
	31 (木)	11/1 (金)	2 (土)	3 (日)	4 (月)	5 (火)	
11　月	6 (水)	7 (木)	8 (金)	9 (土)	10 (日)	11 (月)	
	12 (火)	13 (水)	14 (木)	15 (金)	16 (土)	17 (日)	
	20 (水)	21 (木)	22 (金)	23 (土)	24 (日)	25 (月)	
	26 (火)	27 (水)	28 (木)	29 (金)	30 (土)	12/1 (日)	
12　月	2 (月)	3 (火)	4 (水)	5 (木)	6 (金)	7 (土)	
	8 (日)	9 (月)	10 (火)	11 (水)	12 (木)	13 (金)	
	14 (土)	15 (日)	16 (月)	17 (火)	18 (水)	19 (木)	
	21 (土)	22 (日)	23 (月)	24 (火)	25 (水)	26 (木)	
	東京発	**父島着泊**	**父島泊**	**父島泊**	**父島発**	**東京着**	父島泊数
	11:00	**11:00**	—	—	**15:30**	**15:30**	
	28 (土)	29 (日)	—	—	29 (日)	30 (月)	父島 折り返し
	31 (火)	1/1 (水)	—	—	1/1 (水)	2 (木)	
	1/3 (金)	4 (土)	—	—	4 (土)	5 (日)	
1　月	**東京発**	**父島着泊**	**父島泊**	**父島泊**	**父島発**	**東京着**	父島泊数
	11:00	**11:00**	—	—	**15:00**	**15:00**	
	7 (火)	8 (水)	9 (木)	10 (金)	11 (土)	12 (日)	3　泊
	14 (火)	15 (水)	16 (木)	17 (金)	18 (土)	19 (日)	
	1月20日(月)～2月6日(木)までの間、おがさわら丸はドック入りします。						
2　月	7 (金)	8 (土)	—	—	9 (日)	10 (月)	1　泊
	12 (水)	13 (木)	14 (金)	15 (土)	16 (日)	17 (月)	3　泊
	18 (火)	19 (水)	20 (木)	21 (金)	22 (土)	23 (日)	
	24 (月)	25 (火)	26 (水)	27 (木)	28 (金)	29 (土)	
3　月	1 (日)	2 (月)	3 (火)	4 (水)	5 (木)	6 (金)	
	7 (土)	8 (日)	9 (月)	10 (火)	11 (水)	12 (木)	
	13 (金)	14 (土)	15 (日)	16 (月)	17 (火)	18 (水)	
	20 (金)	21 (土)	22 (日)	23 (月)	24 (火)	25 (水)	
	26 (木)	27 (金)	28 (土)	29 (日)	30 (月)	31 (火)	

※1　館山寄港便。往路父島着・復路東京着ともに 40 分遅延到着（予定）。
※2　大島寄港便。往路父島着・復路東京着ともに 40 分遅延到着（予定）。

◎問い合わせ先　小笠原海運株式会社　☎ 03-3451-5171

さあ！母島へ行こう

母島への航路（ホエールライン）

母島は父島の南約50kmに位置しその広さは約21km²です。島の中央に乳房山（463m）があり島の周囲は58kmあります。母島を観光される方は、
下記の時刻表でぜひ訪島してください。

（令和元年10月～令和2年3月）

沖港

運航月 時　刻		おがさわら丸 父島入港日	おがさわら丸 父島入港の翌日	おがさわら丸 父島出港日	おがさわら丸 父島入出港日	ゆり丸 運航日	その他の日	運休日
運航時刻	父島出港	12:00 ↓ ※はゆり丸 12:00		7:30 ↓ ※はゆり丸 7:30	7:30　13:30 ↓	7:30 ↓	7:30 ↓	
	母島入港	14:00　14:20		9:30　9:50	9:30　15:30	9:50	9:30	
	母島出港	15:00 ↓	14:00 ↓ ※はゆり丸 14:00	12:00　12:00 ↓	10:30　16:00 ↓	14:00 ↓	14:00 ↓	
	父島入港	17:00	16:00　16:20	14:00　14:20	12:30　18:00	16:20	16:00	
運航月日	10月	2 (水) 10 (木) 17 (木) 24 (木)	3 (木) 11 (金) 18 (金) 25 (金)	5 (土) 13 (日) 20 (日) 27 (日)			1 (火) 8 (火) 15 (火) 22 (火) 29 (火) 4 (金) 9 (水) 16 (水) 23 (水) 30 (水) 7 (月) 12 (土) 19 (土) 26 (土) 31 (木)	6 (日) 14 (月) 21 (月) 28 (月)	
	11月	1 (金) 7 (木) 13 (水) 21 (木) 27 (水)	2 (土) 8 (金) 14 (木) 22 (金) 28 (木)	4 (月) 10 (日) 16 (土) 24 (日) 30 (土)			3 (日) 9 (土) 12 (火) 18 (月) 23 (土) 6 (水) 7 (火) 15 (金) 19 (火) 26 (火) 8 (水) 20 (水) 29 (金)	5 (火) 11 (月) 17 (日) 25 (月)	
	12月	3 (火) 9 (月) 15 (日) 22 (日)	4 (水) 10 (火) 16 (月) 23 (月)	6 (金) 12 (木) 18 (水) 25 (水)	29 (日)		2 (月) 8 (日) 14 (土) 20 (金) 27 (金) 31 (火) 5 (木) 11 (水) 17 (火) 21 (土) 28 (土) 24 (火) 30 (月)	1 (日) 7 (土) 13 (金) 19 (木) 26 (木)	
	1月	※8 (水) ※15 (水)	※9 (木) ※16 (木)	※11 (土) ※18 (土)	1 (水) 4 (土)	6 (月) 10 (金) 14 (火) 20 (月) 24 (金) 28 (火)	7 (火) 13 (月) 17 (金) 22 (水) 26 (日) 30 (水)	2 (木) 3 (金)	5 (日) 12 (日) 19 (日) 21 (火) 25 (土) 29 (水)	23 (木) 27 (月) 31 (金)
	2月	8 (土) 13 (木) 19 (水) 25 (火)		9 (日) 16 (日) 22 (土) 28 (金)		1 (土)		3 (月) 7 (金) 14 (金) 20 (木) 26 (水) 5 (水) 11 (火) 15 (土) 21 (金) 27 (木) 12 (水) 18 (火) 24 (月)	2 (日) 6 (木) 17 (月) 23 (日) 29 (土)	4 (火) 10 (月)
	3月	2 (月) 8 (日) 14 (土) 21 (土) 27 (金)		5 (木) 11 (水) 17 (火) 24 (火) 30 (月)			1 (日) 7 (土) 13 (金) 19 (木) 23 (月) 29 (日) 3 (火) 9 (月) 15 (日) 20 (金) 26 (木) 4 (水) 10 (火) 16 (月) 22 (日) 28 (土)	6 (金) 12 (木) 18 (水) 25 (水) 31 (火)	

※2/8 (土)、13 (木)、19 (水)、25 (火)、3/2 (月)、8 (日)、14 (土)、21 (土)、27 (金) は、父島～母島間往復。

◎問い合わせ先　伊豆諸島開発株式会社　☎ 03-3455-3090

帰ろう心の故郷へ！　行こう念願の島へ！！